

Column

あのクリスティーズでアジア人初のワインスペシャリストとして活躍した、世界に誇る日本女性の渡辺順子さんがお届けするワインコラムです。

渡辺順子のワインに乾杯!

第15回

前号までの話

ディナーの最後を飾る伝説的ワイン、ラトゥール1961年がいよいよ登場した……

ラトゥールはすでに2つのデキャンタに移され、ボトルの隣に置かれていた。

通常のものより一回り大きいデキャンタに注がれたワインは、強烈な存在感と威厳を放っている。各テーブルにグラスが行きわたり、ソムリエがデキャンタを持った。リチャードはボトルから丁寧に抜かれたコルクの香りを嗅ぎ、大きくうなずいた。

「皆様、お待たせしました。主役の登場です」

ゲストはソムリエの一挙一動に目を見張っている。ディナーまで陽気にふるまっていたソムリエ達の顔には緊張が走ったが、彼らの慣れた動きは自然で、我々に安心感を与えてくれた。ワインを扱うソムリエの仕事はとても優雅であるが、また力のいる仕事でもある。女性の私にはダブルマグナムのコルクを開けることは無理だっただろう、また2本分のワインが入ったデキャンタを片手で持ち、優雅にグラスに注ぐことも無理だっただろうと思いながら、彼らの動きに見とれていた。



彼らはミシュランの3つ星に輝くフレンチレストラン「ル・ベルナルダン」から、無理を言って特別に手伝いに来てくれたソムリエ達だ。そのソムリエの1人が私のグラスのワインを注ぎ「Oh, my god」とつ

ぶやいて隣のテーブルへ移った。この「Oh, my god」というフレーズは、英語圏の人は口癖のようにどんな時でも発する。困った時、驚いた時、うれしい時、悲しい時、どんなシチュエーションにも使われる非常に便利な言葉だが、アクセントの位置などで微妙に使い分けられ、「Oh my god」と答えるだけで、会話が成り立つこともある。私はNYに長く住み、どんな状況に関わらず「Oh, my god」の意味を聞きわけることができるようになった。

ソムリエが発したのは、驚きと喜びが混った「Oh, my god」であった。それも、これほどのワインがこの世に存在したのだという驚きと、すごいワインに出会ったソムリエとしての喜びに加え、この世にあと何本残っているかわからない61年のダブルマグナムを、自分がサーブしているという現実には驚いているといった意味合いだ。



さて、私のグラスに注がれたワインは、オレンジ色の強いレンガ色をしており、ワインの年代が容易に読み取れる色合いになっていた。やわらかい香りがグラスから立ちこめてくる。「やわらかい」とは香りについての形容詞ではないのかもしれないが、やわらかな布団に包まれたような安らかな居心地のよさを覚えたのだ。香りで癒されている感覚だった。

クロフォード氏の顔も穏やかさが増し、彼もまた「Oh, my god」とつぶやいた。彼のも驚きと喜びであったが、それは期待以上にワインが素晴らしかったという驚きだけでなく、世界で2番目に多くラトゥールを所有しているといわれる自分が今まで経験したことのない感覚を味わったからだった。そして、まだまだワインの世界は深いと知った喜びであった。



渡辺順子(わたなべじゅんこ)

1988年に米国・ニューヨークに留学。ニューヨークにて日系航空会社勤務、ファッション関連の自営業の後、2000年ワインの勉強のため渡仏。その後、ニューヨークへ戻り、世界最大のオークションハウス、クリスティーズ・ニューヨークにて、アジア人初のワインスペシャリストとして在籍。2009年、株式会社FIFTHへワイン部門責任者とし

て任命され、韓国、ニューヨーク、日本でワインセミナー、イベントを開催。欧米のワインコレクターやワイン商と取引し、アジア諸国で活躍。2010年、プレミアムワイン株式会社を日本に設立。2010年末に出版した新書『日本のロマネ・コンティはなぜ「まずい」のか』(幻冬舎ルネッサンス)が好評発売中。

<http://premiumwine.co.jp> <http://www.wguide.jp/>